

を記す。エジプト博物館の監視人（どういわけか制服を着た兵士風）が、筆者を日本人と確認した上で、「ミイラを見せてやる」とか言いながら（推定）、石像の裏にある石棺の前に連れて行って蓋を瞬間開けたようなしぐさをした後、1ドルくれと言った。おそらくこれで成功した経験に基づく行動であろう。蓋の開け方が棺の内部を見るには余りにも瞬間的すぎたので、「ドルは持ってない」とか言って彼の努力は評価しなかった。

歴史博物館の展示の最初の部屋に、空襲で破壊されたフランクフルトの中心部の模型が置いてあった。以前ハノーバーでも同様の模型を見せら

れた記憶がある。我国には空襲の後の風景の模型を作る習慣はあまりないようだ。これが、国民性の反映なのか、日本家屋はすべて燃えてしまうので模型の作りようがないのか、いずれか不明である。

自然博物館の展示によれば、世界最大のカニはタカアシガニという日本産のカニであるそうだ。わざわざカタカナでタカアシガニと書いてあった。また魚類の展示室にも河豚と漢字が書いてあった。

（注）スカ：透，空虚。用例「スカ見たいなやっちゃ」；大阪ことば事典（牧村史陽編，講談社）。

## 浅海先生の退官によせて

栗原尚子

浅海先生と初めてお会いしたのは、去る20数年前、お茶大の地理学科に入学したときであった。後ろを振り向かずがむしゃらに前を突っ走るのに専心する我が性格からしても、先生の退官が目前に迫ると、記憶の闇の中から脈絡のないままに、しかし、鮮明に幾つかの情景が浮かんでくる。

専門であられる土壤地理学の講義は、土壤分類に加えて、その土壤の生成に関する科学的説明が非常に論理的で、知的関心がおおいに覚醒されたという印象が残っている。そして、たんに土壤学ではなく、地理学として考えることが重要なのですという指摘は、当時どれだけ理解できたか不明であるが、先生の地理学観を物語る一端であった。地理学科に所属する学生にとって地理学を勉強している気にならせるのが巡検であるが、私達の学年の浅海先生の巡検は、妙義山から松代に至るものであった。妙義山に登り、風蝕作用や雨蝕作用による岩石の節理を観察するものであったが、山登りに次々と顎を出す学生に、「信じられない」というような先生の面持ちが目には浮かぶ。当時の巡検は山歩きが結構多く、学生の方はこんな筈ではなかったにとぼやいたものである。巡検スタイルと言えば、ヤッケにキャラバンシューズが定番であった。さすが、奈良の巡検のときにはこのスタイルに抵抗する学生はいたが、それにしても、

現在とくらべると隔世の観ありである。妙義山巡検の結末は、群発地震が多発していた松代を目前にして小諸で震度4の地震に遭遇し松代行きは中止となった。ご承知のようにどちらかと言えば寡黙であられた先生と学生時代には話し込む機会を逸したのが今にして思えば残念である。

しかし、8年前に、再びこの教室に戻ってきから、短い期間とは言え、そのお人柄に身直に接し得られたのは私にとって貴重な時間であった。相変わらず寡黙ではあられるが、「ノム」のが決して嫌いではない？私につきあい、先生ご最前のところまで連れて行って下さるときには話に花が咲く。先生のお考えになる地理学といまだ迷路から脱出できない私の地理学とは対照的ではあるが、固い話だけでなく話題は多岐に渡った（後者の方が圧倒的に多いのが事実ですが）。

しかし、私にとってもっとも心に残ることは、あるいはむしろ私にとって先生との原点となったとも言えるようなことは（私だけの勝手な解釈）、8年前、就任の挨拶に研究室を訪ねたときの出来事である。「先生、これからどうぞよろしくお願い致します」と申し上げたのに対して、「もう先生ではなく、これからは仲間なのですから」と応えてくださったことであった。爾来、この言に何度救いを求め、そして事実救われたことか分から

ない。一つの出来事は、多義的に解釈されうる。そして、その解釈は、その人が生きる日常においてどのようなスタンスに立っているかによって異なってくるだろう。時間にしたら本当にわずかな流れの中での出来事であったが、浅海先生のお人柄を凝縮して示しているようで、これからも心に残ることであろう。

これからは、先生のご健康とこれまでやれなかったことに打ち込んで下さることを祈るとともに、長いあいだに渡って先生が、地理学教室で果たして下さった役割を少しでも果たすように努めることが、後を行く一人としての仕事であろうと思っている。

## もういくつ寝ると……

久保幸夫

これを書いているいま、あと4000日で21世紀になる。なにか遠い将来のような気がしていた21世紀が目前になった気がする。

昨年のいくつかの出来事は、確実にある時代が終わりつつあるという証左であった。東西冷戦の終焉、東欧のドラスティックな変化は、戦後政治体制の終結ということだけでなく、近代社会がいよいよ幕を閉じようとしているということを印象づけた。工業社会であるところの近代社会において、マルクスは労働の疎外を述べ社会主義を提唱したが、近代社会そのものが次の社会（ポストモダン、ネオモダン、情報社会などと今のところ呼ばれているらしい）に変わりつつある現在、社会主義が変質を遂げねばならないのは自明の理であるだろう。

1980年代のキーワードは、「情報化」、「国際化」、「高齢化」であった。この3つのキーワードは基本的には社会の移行を意味するものだ。なによりそれぞれに「化」という変遷を示す文字が付けられている。情報化も個別の機械のレベルでは1980年代にかなり進展したが、ネットワーク、データの面ではまだまだである。情報化に伴い、さまざまなデレギュレーションが必要であるが、日本ではこれに逆行する政策がとられた。このことは、1980年代において情報の偏在、集中をうんだ。また、国際化も1980年代前半の「モノ」から「ヒト」へ進んだが、さまざまなコンフリクトを

まだ生じている。高齢化は、前近代社会の「多産多死」から「多産少死」をへて「少産少死」に至る過程での問題であった。

さて、1990年代のキーワードは何だろう。1990年代には、情報社会がほぼ完成するだろう。このため、まだ完全ではない情報社会のインフラストラクチャの整備が課題となってゆく。同時に移行期において発生する矛盾の解消が大きなテーマになる。「ネットワーク」、「地球化」、「環境」などがキーワードになるのではないか。だが、これも、過渡期のキーワードに過ぎない。問題は、21世紀になって形成されるだろう新しい社会システムがいったいどのようなもので、そこにおける価値基準や理論体系がどうなるかだ。

地理学にとっての問題は、現在のこの大きな社会変動をどうやってとらえていくか、ということと、これからの社会に対応して地理学そのものをどのように変えていくか、ということにある。リッター、フンボルトに始まる近代地理学自体、近代社会、そこにおける近代科学というフレームの中で登場してきた。したがって、社会が変化している状況の中で、いままでの地理学の概念や枠組に固執すれば地理学の衰退は目に見えている。

21世紀の地理学の(もう、その時には地理学とは呼ばれないかもしれないが)枠組を作る作業は、もう始めなければならない時期を過ぎたと思う。いったい誰が近代地理学の首に鈴をつけるのか。